〔論文〕

国内外における修験道の変容の現状

コジチ　ヨシコ

Josko Kozic

文化庁により開催される「日本遺産」というキャンペーンの一環として、2020年に修験道は日本遺産として承認され、登録された。以来、このブランドは修験道の主要な地域のひとつである和歌山県や他地域において一般人を対象とした「修行体験」を開催し、地域の観光マーケティングを拡大するために利用されている状況が見受けられる。全国のさまざまな修行団体も、聖域を離れてSNSに集い、新たな仕組みを作ったり、ウィスコンシン州の「光林寺修験道場」のように、日本国外で修行する国際団体と協力したりしている。修験道はそれによって、環境と持続可能性、国家のアイデンティティと文化遺産に関する政治的議論を含む、数多くの議論に関与している。以上のことから、宗教が社会経済にどのような影響を与えるのか、また「伝統」「宗教」「文化」に対する想像力という現在の問いが展開されていく。

著者は、地元関係者と深く交流しながら、2025年の大阪万博をめぐる文化遺産キャンペーンと、その中で「修験道」という項目が果たす役割について、最新かつ詳細な現地調査を進めている。天田顕徳氏によると、修験道は、あらゆる宗教の修行者にとって「聖地」とされる場所や、いわゆる「パワースポット」と呼ばれる場所と結びついた観光ブームを裏付けし、今やマスメディアにおいても大いに注目されるようになったという。しかし近年、修験道は国内外への拡散、商業化、メディアによる大衆化という進化を遂げている。研究者のShayne Dahl氏が2021年にハーバード大学で行った講演「Ancient Spirit, Modern Body: The Rise of Global Shugendō（古代の精神、現代の身体：グローバル修験道の上昇）」によれば、修験道は「国境を越えた宗教」となっているようである。修験道がどこでどのように実践されているかにもよるが、このような発展により、修験道の実践は、もともとの儀式中心の宗教的文脈から部分的に引き離され、切り離されているようにも見える。修験道は、過疎化と対面している地域を活性化させるための地域協力や町おこしのツールにさえなっている（天田 2019, 148）。数年前に修験道研究の国際的・学際的アプローチが強化されて以来、現在に至るまで、日本人・外国

人を問わず、何人もの修験者が幅広く多彩な研究に応えてきたと言えるだろう。その一例が、山形県で修験道や田舎暮らしに関連するコンテンツを制作し、ウェブショップを運営している「聖者」という修行者である。本人のウェブサイトには、「現代修行者の活動」も紹介されている。その中には、山伏文化の活性化と PR 活動、山菜・ハーブ・キノコの採取と頒布、農山漁村の人々の手仕事による工芸品のリデザインと頒布、古民家の改修、中学生から社会人・大学講師までの自主勉強会、地域文化の研究などの項目が掲げられている（http://hijirisha.jp/about/）。これは、さまざまな性別と国籍の修験道修行者が実践、教育、環境活動、メディア関連の仕事に携わりながら、国内外でメディア活動をしている数多くの事例のひとつに過ぎない。

そういった一例を挙げると、外国人の女性修験者（アレナ・ユシュ・エッケルマン）という修行者がいる。山伏としてだけでなく、森林浴ガイドの免許を持ち、雑誌『Buddhist Door』の「Shugendo Diaries」に書かれているように、現代の修行者の活動の中で仏教や神道に関連したコンテンツを提供するオンライン雑誌に寄稿することもあると言う。現代日本で積極的に活動する外国人女性修行者としての自身の経験を共有する彼女の寄稿は、いくつかの修験道団体や儀式の復活、修験道の活発な実践の場であったと考えられる数多くの場所の再生にも焦点を当てている。最後に、修験道について研究している研究者や、修験道とその現在の実践についてドキュメンタリーを制作した映画監督へのインタビューも掲載している。

続いて、修験道の実践者でありエコツーリズムのコンサルタントでもある外国人男性（リチャード・ピアース／ヤンチャ坊主）のように、最近では修験道が環境保護活動と結びつけられることも多く見受けられる。このプロジェクトは、鳥取県を中心に、オオサンショウウオの保護と教育プログラムなどによる「持続可能なライフスタイル」の普及に取り組んでいる。また、山形に住むニュージーランド出身の修行者（ティム・バンティング／リョーゼン）は、外国人向けの山伏体験・トレーニングを提供する団体「Yamabushido」のプロジェクトマネージャーとしても活躍している。また彼は、YouTube チャンネル「Seek Sustainable Japan」のホストであるジョイ・ジャーマン・ウォルシュからもインタビューを受けている。これらはすべて、21 世紀のデジタル化されグローバル化した現代社会において、修験道や修験道関連の話題が目に見える形で存在し、アクセスしやすくなっていることを示しているだろう。更に、修験道が「拡散した宗教性」や「エコ・スピリチュアリティ」の表現となりうることも示唆している。これらは、「アニミズムやシャーマニズムの世界観に基づく、エコロジーとスピリチュアルなニーズや問題との相互関連性に対する世界的な関心の高まり」を意味する（Roth 2019）。菊地大樹氏は、修験道に関して、民族的所属に基づく宗教的言説を批判している（菊地 2020）。彼は民族人類学的なアプローチによって、山岳宗教が日本固有の宗教であると主張することについて述べている。それによると、基本的な信仰（基層信仰論）

の考え方が表面化し、日本神論などの典型的な文化論議に共鳴を見出すようになったという。したがって修験道は、次の例に見られるように、ネオネイティビズム的なレンダリングや解釈の投影台として機能することもあるだろう。

更に、独自のチャンネルを主催しながら、国際的なグループとそのコンテンツ、議論、ダイナミックスをSNS上で情報を共有することで、すでにオンライン世界の一部となっている団体もある。宗教学者のケイトリン・ユゴレツ氏は、ネットノグラフィーの研究手法を駆使し、グローバルな神道を例に、SNSがオンラインとオフラインの両方で連携し、日本宗教のグローバルな内面化を可能にしている事実を示している（Ugoretz 2021）。日本宗教についてSNSを検索すると、多数の公式アカウント（仏教寺院や学校など）、宗教関係者の公開プロフィールと出会うことができる。

修験道関連のグループには、一般人による参加可能な団体や、メンバーがさまざまなテーマについて情報を投稿できるグループやサイトなど、いくつかのカテゴリーがある。このようなグループの中に、フェイスブックに「Mountain Religions」という名前で、2人の国際的な研究者によって管理されているものがある。公式の説明によると、このグループは日本の山岳宗教に限定していないが、まさにこのトピックに関する投稿が際立って多い。現在、世界各国から222人のメンバーが登録している。投稿の中には、イベントや出版物の情報、質問や議論を含むスレッドもある。客観的な情報交換を目的とした、中立的と思われるフェイスブックのグループ「Mountain Religions」とは対照的なのが、「公認修験道僧侶」と自称し、日本語と英語での投稿を公開している甑岳聖道氏の公式プロフィールページである。彼のプロフィールは、世界中で5000人以上のフォロワーを抱え、いわゆる「甑の伝統」の総本山であり、「国際修験道協会（ISA）」の創設者とみなされている。彼は主に神事や講演会、海外からの参加者を含む登拝の写真を公開している。彼の投稿にはしばしばコメントが寄せられ、肯定的なフィードバックや、参加希望、さまざまな儀式への期待、あるいは単に合掌する絵文字などがある。それとは別に、彼は有料の指導トレーニングの招待も公開している。さらに、いくつかの事柄について批判的な考えを発表し、修験道の修行において何が「本物」であり、何が「本物」でないと考えられるかを明らかにしている。フェイスブックへの投稿には、修験道に欠かせない修行法であり、日本の主要メディアで広く普及している「滝行」と呼ばれる修行法について意見を述べているものがある。

> 滝の瞑想は単なる禁欲的な修行ではない。天から降った雨が何十年もかけて湧き水となり、全身でそれを感じながら身を浸した瞬間に、天と地と人をつなぐエネルギーを感じることができる。このエネルギーが全身の細胞を活性化し、体が軽くなり、視界がクリアになる。ただ「いいね！」を押すのではなく、ぜひ自分の体で体感してほしい。（甑岳聖道氏2024年8月22日のフェイスブッ

クの投稿より）

フォロワーは時折そのような意見を信じ、それに対して自己の疑念を共有したり、さらなる質問を彼に投げかけたりもする。修験道へのデジタル交流に関心が集まる理由は、COVID-19 の大流行で起こった厳しい渡航入国制限にあるのかもしれない。修験道の修行者にとって「聖地」とされる場所へのアクセスが制限されたことで、「遠隔地」での出会い、宗教活動へのデジタル参加、聖地へのデジタル巡礼といった形態までもが誕生した。先の例で述べたように、修験道の個人（またはグループ）の中には、自分たちの宗派について、信憑性や排他性を主張する者さえいる。彼らはこうした考えをオンラインで共有すると同時に、通常は有料の研修プログラムを宣伝する。これらの関係者は、デジタルツールの助けを借りて、デジタルに媒介された（仏教的な）意味論、修行法、デザインの形で、日本の山々に限定されると思われている「神聖な力」を投影している。ネット上に存在する修験道グループの場合、これはしばしば自己最適化の約束を宣伝することを含む。このようなオンライングループの膨大なダイナミックさとアクセス可能な素材の豊富さゆえに、どの個人やグループがどのようなコンテンツを発信しているのか、中立的な意志や情報の交換、各グループ共通の（宗教的な）オンライン活動、個々の関係者が発表する説教の間に明確な境界線があるのかどうかを観察することが重要であることに変わりはない。

デジタルコンテンツ、メディアコンテンツとしてのブランディングと同時に、修験道は 2020 年から和歌山県葛城市を中心とした「日本遺産」として正式に登録された。日本遺産は「地域の歴史的魅力や特色を活かした文化・伝統の語り継ぎ」（文化庁）を認定するもので、その目的は「語り継ぎを形成する文化財の維持・活用・戦略的な振興」による地域活性化にある。葛城修験が日本遺産に認定された 2020 年には、91 件の文化財が登録された。「日本遺産」キャンペーンの一環としての修験道の代表は、葛城修験日本遺産活用推進協議会事務局である和歌山県観光振興課が務め、英語と日本語による情報資料やウェブサイトの作成に積極的に取り組んでいる。その最新の成果は、デジタル版・印刷版のパンフレットや地図で見ることができる。さらに、葛城修験では、観光団体のガイドとしてキャンペーンに貢献することを希望する山伏のためのスクーリングも行っている。また、葛城修験各会が重要視する人気の巡礼ルートやスポットをデジタル登録することで、登山アプリ「YAMAP」との連携にも成功した。葛城修験の場合、国家や民間のさまざまなアクターがユネスコなどによる認定を求め、特定の歴史的物語を検証し普及させ、国内的･国際的な正当性を得るためにそれらが不可欠であると考え、宗教を「文化遺産」として捉えている（Rots 2019; Teeuwen 2020; Reader 2023）。このような努力の結果、礼拝所／儀礼的慣習が目に見える形で変容し、収奪される可能性があるとも言える。したがって、礼拝所は世俗的であると同時に、神聖な公共財産となる。

「ヘリテージメイキング」は最終的に、国家的、公共的、世俗的な神聖財産としての場所や慣習の再構成につながる可能性がある。そのためには、次のような問いに焦点を当てながら、今後の兆候や進化を観察することが非常に重要である。すなわち、修験道の実践はどのように位置づけられ、どのような変容を遂げ、再物質化され、再ブランド化されていくのだろうか。

《文献》

天田 顕徳、2019 年、Notes on the Revolution of the Image of Shugendō ―Centering on the 1970s and 1990s―. *Bulletin of the Chuo Academic Research Institute*. No.48 2019/11: 141–152.

菊地 大樹、2020 年 7 月、『日本人と山の宗教』、講談社現代新書。

Reader, Ian. 2023. Mystical Mountains and Ascetic Training as Tourist Attractions: Spiritual Japan for Visitors. *Religion and Tourism in Japan: Intersections, Images, Policies and Problems*. Bloomsbury. 2023: 161–180.

Roth, Carina. 2019. Essays in Vagueness: Aspects of Diffused Religiosity in Japan. *Invisible Empire: Spirits and Animism in Contemporary Japan*. Fabio Rambelli (ed.), Bloomsbury: London/New York. 2019: 95–108.

Rots, Aike P. 2019. World Heritage, Secularisation, and the New 'Public Sacred' in East Asia. *Journal of Religion in Japan 8*. 2019: 151–78.

Teeuwen, Mark. 2020. Kyoto's Gion float parade as heritage: Between culture, religion, and faith. *Sacred Heritage in Japan*. Aike P. Rots, Mark Teeuwen. Routledge: London. 2020: 134–158.

Ugoretz, Kaitlyn. 2021. World-Wide Shinto: The Globalization of "Japanese" Religion. *The Bloomsbury Handbook of Japanese Religions. Erica Baffelli, Andrea Castiglioni, and Fabio Rambelli*. Bloomsbury: London/New York 2021: 145–147.

コジチ　ヨシコ
（ハイデルベルグ大学）